
“ LI-EV ”

帽子屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“ L I — E V ”

【Nコード】

N 4 1 4 1 A

【作者名】

帽子屋

【あらすじ】

『感覚を破壊する事で、代償として人体を進化させる』その理論のもとに行われた、軍のプロジェクト“ L I — E V ”^{リリース}被験体達が、失ったものを取り戻そうとした時、歯車は廻り始める。

001：第一次実験報告

—『LIMITED EVOLUTION PROJECT』..
コードネーム“LIEV”^{リーヴ}に関する報告—

「人為的な感覚破壊による人体の限定的進化」

をコンセプトとしたこのプロジェクトは、現時点において、2%の確率で成功。被験体200名の内3名に、特異な能力の発現を確認している。

被験体はそれぞれ、No. 01・No. 02は軍部直属の研究施設『ターミナル3』『ターミナル6』に収容。No. 03に関しては、被験以前より発病している重度の血液疾患の為、民間の医療機関『アストラル記念病院』にて収容している。目下、能力の全容解明とさらなる開発に向けて、実験を継続。進展があり次第、追って報告する。

一尚、副作用等、最も懸念される面については、未だ不明。次回報告を待たれたし。

002..BATTLE IMPRESSION

一空氣が、張り詰めていた。

呼吸音が聞こえる。それは俺のものなのか、それとも目の前にいる奴らのものなのか。睨み合う中、それだけがやけに大きく響いていた。

鋼鉄の壁に囲まれた、一辺10m程の、薄暗い部屋。目の前の奴らは4人。皆黒いボディースーツにプロテクター、ゴーグル付きのヘルメットで身を固めている。手にはそれぞれ、金属の警棒やらナイフやらが握られていた。

対する俺は1人。

「やれ！」

リーダーらしき男が叫ぶ。と、残りの奴らが一斉に、俺の方へ突進してきた。

一さあて、始まりだ。

突き出されたナイフが迫る。俺はその腕を掴み、そのまま腹に膝蹴りを叩き込む。

肋骨の折れる感触。

続く警棒の襲撃を右腕でガードしつつ、俺はナイフ野郎の身体を、思い切り右の蹴りで吹っ飛ばす。それは狙い通り、駆け寄ってきた3人目を直撃した。そのまま、折り重なる様に倒れるのを確認しつつ、その動作で捻れた身体の反動を利用して、今度は左の拳を、警棒野郎の喉にめり込ませる。

パーン！

膝を折り、崩れ落ちる警棒野郎。と同時に、乾いた音と衝撃が俺を襲った。こめかみが強烈に痺れる。反射的に、音のした方向に顔を向けた。

銃口が見えた。微かに煙が立ち昇っている。

リーダーの野郎が、撃ちやがった。よりにもよって頭を。

奴は両手で銃を構えたまま、呆然としていた。信じられない、と言わんばかりに見開られた眼が、ゴーグル越しでもはっきりと分かる。

—そりゃそうだ。人間の頭が鉛弾を跳ね返す光景なんて、そうそうあるモンじゃない。

俺は奴に向けて、一気に駆け出した。見る見るうちに、慌てふためく奴の姿が近づく。その勢いのまま、俺は突き出した腕で奴の頭を、強烈に壁に叩きつけてやった。

ズルリ。

手を離すと、まるでボロ雑巾の様に、奴の身体は壁を擦って倒れた。メット越しでも、今のは相当効いただろう。脳震盪でも起こしたか。

—お返した。

俺は奴を見下ろし、思わず口の端を吊り上げた。

003：被験体No. 02、藤宮間様の肖像

「…殺すなと言ったろう」

低い声が響いた。天井にある、スピーカーからだ。

「殺してないぜ。」

見上げて、俺は叫ぶ。

「重傷だろうけどな。正当防衛ってやつだ」

幾分嫌味を込めて続けた。赤ランプの点灯するカメラに向かって、両手を広げてみせる。

スピーカーの向こうから、深い溜息が聞こえた。

「まったく…まあいい。テストはこれで終わりだ。さっさと事後検査を受けろ」

ブツン。

言い終わった途端、耳障りなノイズが走った。どうやら俺の返事も聞かず、電源を切ったらしい。

相変わらず勘に触る野郎だ。

「了・解」

聞こえないだろうが、俺は苛立ちを込めた声で言っていた。



『L I — E V 計画』

そのモルモットとして、俺はここにいる。

味気ない白塗りの通路が、延々と続いている。時々すれ違う白衣の研究員どもは、相変わらず、何を考えているか解らない顔で、俺を見ていた。それにいい加減うんざりしながら、俺は辿り慣れた順路を足早に進んでいく。

ここは地下深く掘りぬかれた、軍部直属の研究施設、『ターミナル6』一戦争好きの政治屋どもが造った、危険極まりないおもちゃ箱だ。その研究範囲は広く、重火器・薬物・金属・果ては生体兵器に至るまで、およそ戦争に役立ちそうなものは、何でも手掛けている。

お陰で、その規模はまるでひとつの街を詰め込んだかの様に、雑多で巨大だった。俺もここに来て2年になるが、今だにほとんどの部分を、把握出来ていない。

「もう2年、か…」

医療セクションに通じる扉の前。呟きながら、俺はセキュリティ端末のキーボードを叩く。ややあって、合成音声が響いた。

『マロウ・フジミヤ…カクニン。ドアロック、カイジョシマス』
扉は音も無く開いた。俺は更に奥へと、歩を進める。

…2年前まで、俺は陸軍にいた。内戦の絶えないこの国では、毎日あちこちで、当たり前の様に戦闘が起こる。そんな中で、俺は数えきれない程の人間と戦い、そして殺してきた。

来る日も来る日も。

別に、大層な志があったわけじゃない。俺はただ、闘いたかった。日常の不満から抜け出す手段ーガキの喧嘩と一緒に。

そんな心構えの俺に、軍組織の枠は窮屈過ぎた。命令無視、上官への反抗…上の奴らとの折り合いは、正直最悪だったと思う。

だから、当然と言えば当然かもしれない。『被験体を提供せよ』という上層部の命令に、奴らが生贄として選んだのが、俺だった。

「…上層部が求める被験体の条件に、貴様はほぼ符合する」

「これは非常に名誉ある任務だ。誇りに思う事だな」

俺をここに送り出す時の、上官どもの白々しい台詞が忘れられない。

一要は厄介払いって事だろ…カッコつけんな。

俺の腹ん中が、どこまで解っていたのか。多分、伝わっていただろう。

最後に交わした握手は、お互い、憎しみに満ちていた。

…あの日から、もう2年が経つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4141a/>

“ LI-EV ”

2010年10月22日00時52分発行